



## いまこそ、地域防災を語ろう。

消防庁国民保護・防災部長 田辺 康彦

現在の災害応急対応は、阪神淡路大震災の課題と教訓がベースとなっています。もちろん、東日本大震災はじめ、その後の災害の課題と教訓により、バージョンアップされていますが、ベースそのものは、阪神淡路大震災といえるでしょう。

ここでは、「課題」は反省すべき点、「教訓」は共有すべき点とします。

課題から検証してみましょう。

まずは、初動体制です。私は、消防庁に4回、勤務しましたが、阪神淡路大震災前の1回とその後の3回では、生活そのものが違いました。最初の1回は、東京郊外の実家から通勤しましたが、その後の3回は危機管理宿舎に入居しています。阪神淡路大震災後に発足した、発災後30分以内に危機管理省庁局長級幹部が官邸に参集する緊急参集チームのシステムは、国の初動を根本から変え、各省庁の初動体制も大幅に改善されました。

広域応援体制はどうでしょうか。皆様ご承知の緊急消防援助隊は、阪神淡路大震災後に運用を開始し、その後、法制化されています。5年ごとの基本計画にあわせて隊の編成や設備を充実してきたほか、毎年の訓練や実際の出動時の「振り返り」により、迅速かつ適切な部隊運用に向けた見直しを行ってきました。消防の世界以外でも例えば、物資についての国によるプッシュ型支援や応急対策職員派遣制度による人的応援体制の整備など、広域応援の仕組みは着実に向上しました。

「平時からの備え」をみても、災害応急対策の拠点となる庁舎の耐震化率など、個々の自治体で課題は残されているものの、行政の防災力を示すマクロの数字は向上しています。

行政の災害応急対応に完成形はなく、日々改善と点検を続けていかなければなりません。阪神淡路大震災の「課題」については、対応してきたといえるでしょう。

次に、教訓です。

阪神淡路大震災の最も重要な教訓のひとつは、「初期段階では、常備消防では手がまわらず、地域の消防団や近隣住民により救出活動が行われた。」という点です。救出者全体の8割(以上)は、消防団等地域住民により救助が行われたとされ、大規模災害になればなるほど、行政による対応には限界があり、消防団や自主防災組織などできる限り現場に近い方々の力が必要ということです。

この教訓への対応はどうなったのでしょうか。

数字がすべてではありませんが、マクロの数字をみると、自主防災組織の組織率など増加してきたものもありますが、地域防災の要である消防団、250万人いた女性防火クラブ、将来を担う少年消防クラブ、残念ながらいずれの人数も大幅に減少しています。

私は、市町村長の皆様に講演をさせていただく際には、阪神淡路大震災時の地域住民の活

---

動を伝える神戸市消防局の資料をお借りし、「皆様方がいくらいいいパフォーマンスをしても、現場でやってくれる人がいなければ、人の命は助かりません。個々の市町村の災害対応の強さは、消防団や自主防災組織など地域住民の力にかかっています。」と話をさせていただきました。

昨年12月、消防団員数がはじめて80万人を下回ったことを受け発出した消防庁長官通知には、「全国各地で災害が激甚化・頻発化する中、大規模災害になればなるほど、地域に密着する消防団の迅速な対応により、多くの人命が救われてきたところであり、地域住民が主体となる消防団の充実強化を図ることの重要性は、これまでの災害経験を踏まえた教訓である。」との記載があります。通常の行政の通知文には、なじまない文章ですが、長官の許しをいただき、私の思いを書かせていただきました。

2004年のスマトラ島沖大地震に伴う津波災害の際、国際緊急援助の一員としてタイ国のプーケット島に派遣されました。クリスマスシーズンでもあり、観光客を含む多くの方が犠牲になる中、犠牲者ゼロの部族の話を知りました。その部族は、「潮が引いたら高台に逃げろ」という過去からの言い伝えが伝承されており、みんなで声をかけあい、高台に避難し、難を逃れたとのことでした。地域の力で命を守ることの重要性を切実に感じたことを思い出します。

オーストラリアに勤務していた際、ある市長から、日本の学校の給食と掃除について学びたいので、視察先を紹介してくれないかとお願ひされました。日本のヘルシーな食生活や街にゴミが少ない理由はそこにあるかと思っていました。日本をよく訪れる方に、「あなたは、なぜ、何度も日本に行くのですか？」と聞いたところ、「日本では、行く先々で新しい文化に出会えます。いつも、新しい発見ができるのです。」とのことでした。

3年間のオーストラリア生活を通じ、日本の国力の源泉は「文化」と思うようになりました。経済には良いときもあれば悪いときもありますが、文化（や習慣）はそう簡単に変わるものではありません。どこにいても世界とつながる時代となったからこそ、日本が世界をリードし、魅了するのは、日本が長い年月をかけて築き上げた文化と考えています。

地域防災は、災害大国日本の知恵の結集、世界に誇る文化です。失うわけにはいきません。いまこそ、地域防災を語ろう。